



昭和52年5月1日

編集・発行

岡崎市教育委員会



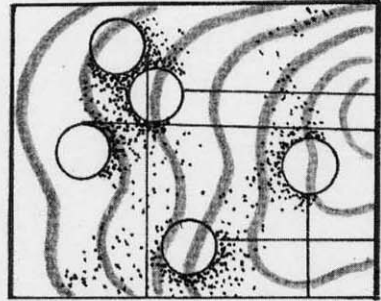
碧き海を渡る風
 まともに受けて
 新生岡崎小学校は聳える。

百年の歴史に育まれ
 羽角の峰を望み
 勝鬘寺の蓮池の地に
 今、子らは駆けめぐる。

(新築なった岡崎小)

和解のこころ

佐々木 静江



家庭裁判所の調停と申しますと、何か裁判でもするように、大げさに受けとられて、敬遠される向きがありますが、調停とはそんなものではありません。「裁く」ではなくて、「話し合い」による「和解」が調停の本すじです。

そこでは、お互い双方の言い分を十分述べてもらいます。ある程度の日数、回数をかけて、くりかえし時間をかけてじっくり話し合いをするわけです。そうこうしているうちに、今まで自分が気づかなかつたことに気づいたり、他人の立場も冷静になって理解できたりするようになることを期待するのです。頭から、ああしなさい、こうしなさいと決めつけているのではなく、調停員の助言やサセスションによって、よりよい道を見つけていく——こういう精神なんです、このへん

が先生方のお仕事とも似通っているのではないでしょうが。

私も調停員ですから、双方の事情や言い分を十分拝聴した上で、「ああしなさい。」「こうしたらどうですか。」と、はっきり申しあげ、円満に和解できるようにするわけですが、根本はあくまで、本人の意志次第です。ですから、いやなら取り下げることも自由ですし、ご希望によっては裁判の方へもついでいくこともできるわけです。

最近、社会情勢の変化にともなって、調停の仕事もふえてきておりますが、それに関連して、一つ気になることがあります。

それは、女性、特に主婦が仕事をもち、家を空けることが多くなり、それが遠因、近因になって、家庭内にトラブルが生ま

れることが目立つことです。

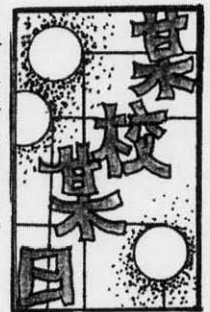
昔と違って、男女同権で、女性の方も男性と同様、あるいはそれ以上、立派な仕事を外でされている方もふえ、まことに結構なことであります。ところが、少しでも家計を助けたい、子供の教育費ぐらいとりたい、という純粋な動機が、いつのまにか虚栄心を満たすこと、せいたくをしたいために働くとか、刺激を求めて家庭をおろそかにするというふうに変わってしまうことがあります。

これは、もちろん女性側だけの責任とは言いきれませんが、予め家庭全部の理解と協力体制を整えた上、つとめて家庭生活や子供の家庭教育に支障のないような時間や勤め先にしなければなりません。子どもなりに家庭の事情は察していただきますので、ある程度の不便は心得てくれますが、度を過ぎるとトラブルの基になり、私どもの方の問題ともなってくるわけがあります。

このような時代ですから、外で働くのも結構、自己主張も結構ですが、その影響や他人の立場もお互いよく考えたいものだと思います。

(注)調停のとりきめは、法律と同じ効力があります。費用は印紙代三百円のみです。調停までもつていかななくても裁判所関係の方が相談のつて下さるので、お気軽にご利用下さい。

(家庭裁判所家事調停委員)



安兵衛訪問記

澤 博 史

「こんばんは。」トントンと二階へ上がりドアをノックして中へ入る。瞬間、驚きのKの顔が緊張してくる。

「どうだ、調子はどうか。」

「はい。」Kの机には国語のノートがひろげられ、志賀直哉の作品に朱線が引かれていた。のぞき込む私に、彼の顔はうつすらと紅潮してきた。今日の国語の授業が鮮やかによみがえってくる。

「正義派の作者は志賀直哉だが、この外志賀直哉にはどんな作品があるか。」

「小僧の神様、和解、城崎にて……。」

「はい。」Kが力強く手を上げた。

「安兵衛と瓢箪です。」

一瞬して、大爆笑の渦に包まれた。Kはぼかんと立って立っている。そして、清兵衛の勘違いに気づいた時のKの顔……。

「ごろうさま。」両親が上がつて来た。「先生、何か学校であったのですか。夕食に好物のカツを出したら、とたんにぶつとぶくれるんですよ。でも、それでいて全部平げてしまいました……。」

私は、ふき出すのを必死にこらえた。安兵衛のカツか。思わずすきつ腹がグーと



小さな漁人 コアジサシ

ふるさとの自然

矢作川は岡崎市の農業や工業に重要な役割を果し、市民の生活とは切り離せない河川です。一方、野鳥にとっても重要な生活の場となっており、すでに、五十種以上が確認されています。この矢作川に生活する野鳥のうち、夏の矢作川に欠かさないコアジサシについて述べてみようと思います。

コアジサシは、四月の上旬になると、はやばやと南の国から日本の大きな河川や海岸に近い池に現われる渡り鳥です。岡崎市にも毎年四月になると、矢作川に元気を姿を見せてくれます。

コアジサシはカモメ科に属し、アジサシ類の中では最も小形でハトよりもやや

小さな鳥です。翼は細く、その先端は鋭くがっていて、からだの割りに長いので、飛んでいる姿は実際よりも大きく見えます。からだ全体は灰色がかつた白色で、頭部だけが黒色をしています。ゆつくりと羽ばたき、川の流れに沿って飛び、空中で停止し、急降下して水中の魚を取りますが、失敗のほうが多いようです。

コアジサシは夏鳥として、日本にやって来て繁殖し、秋になると南の国へ帰ります。矢作川でも、六月初旬になると、渡橋と美矢井橋の間にある中洲で営巣（巣を作ること）を始めます。昨年の観察では十二個の巣を確認しました。巣といっても砂地に穴をあけただけの簡単なもので、巣材は全く用いていません。またコアジサシの巣のまわりに、コチドリが営巣しますが、コアジサシは細かい砂、コチドリは粗い砂の上に巣を作り、ちよちよどこチドリの巣がコアジサシの巣を取り囲むように作られています。攻撃力のあるコアジサシにコチドリは敵から守ってもらっているようです。

コアジサシは普通卵を三個生みます。色は砂地とよく似ているため注意深く観察しないとわかりません。雌雄交代で卵を抱き、六月中旬から下旬にかけてヒナをかえします。昨年の観察では二十日頃が最もヒナの数が多かつたようです。

卵を抱いている時やヒナがいる時などは、外敵が近づくと集団で舞い上がり、キリッ、キリッと鋭い声をあげて威かくし、外敵を追い払います。またふ化した卵の



砂のようにかモフラージュされた卵

殺やヒナのふんは巣の位置を外敵に発見される原因になるので、くわえて川に捨ててしまうようです。親鳥はヒナに十分一度くらい魚を与えます。ヒナは親鳥が近づくと、ピーピーと甘えた声を出し、魚をねだります。また外敵が近づくと死んだふりをして危険をさげます。このようにしてヒナは急速に成長し、七月中旬には親鳥と同じくらい大ききになります。しかし羽毛は砂地と同じ保護色をしています。八月になると親鳥は外敵が近づいてもあまり警戒しなくなり、九月中旬まで矢作川で生活し、南の国へ帰って行きます。

コアジサシが岡崎市に渡ってくる数は年々増えているようですが、本米海岸付近に生活するこの鳥が、河口から十数キロメートルも上流の中洲へ飛来するのは何を意味するのでしょうか。

(矢作中 明保俊通)

● 赤白帽子

長坂 八重子

鳴る。安兵衛事件を話すと両親も大笑い。ちなみに生活ノートには、明日は五月十三日、金曜日、仏滅。何か起りそうな予感がする。」と。

(城北中)

本日晴天、全校集会の開始である。白帽子が入り乱れて、次第に列を整えだしてきた。ところが、白、白、白の中にポツン、ポツンと赤が、なんとまあ間ぬけのように私の目に映る。んっ、もう!! あまりのまどろっこしさに耐えかねて、一人一人帽子をひっくりかえしに、私自身が終わった。そして、ひととおりそれが終わったところで、どうしてあんなたちは、そんなことがわからんの! と、目を三角に……。すると、どうだろう、私のいかりにあふれたそのことばに対して、返ってきた小学校一年生の声はこうだ。

「だって先生、帽子かぶっちゃってると、頭の上は見えんもんで、何色になつとるか、わからんよ。」

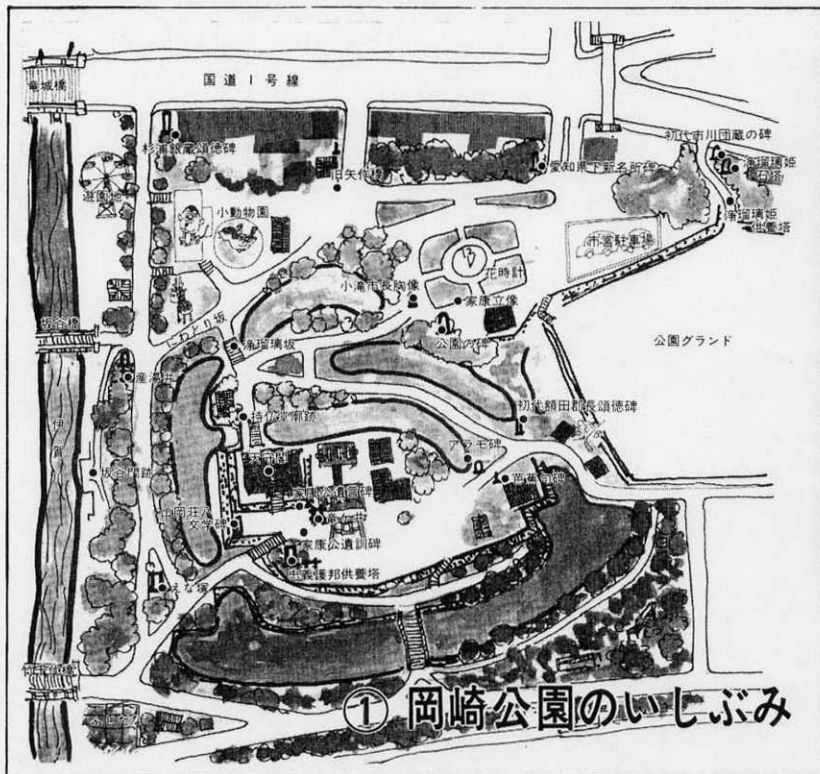
なるほど、私が見るよりは本人は目につかないので、苦にならないのは当然だ。むしろ、まわりの者の無とん着さを責めなくてはいけないのかもしれない。

しかし、次の日K君が、「ばく、きのうお母さんといっしょに考えたよ。あのねぼうしのひさしを下げて見て、赤が見えたら白、白が見えたら赤になつとるだよ。」と、にこにこ顔で話してくれた。

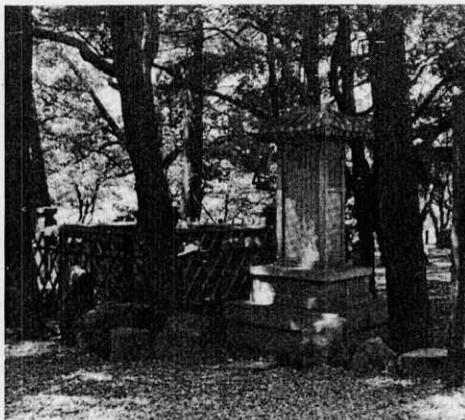
(岩津小)

岡崎再見

灯台もと暗しとか。天下の名園も案外知られていないのが実情。そこで、今回はその第一回として、古きいしぶみを中心に探る。

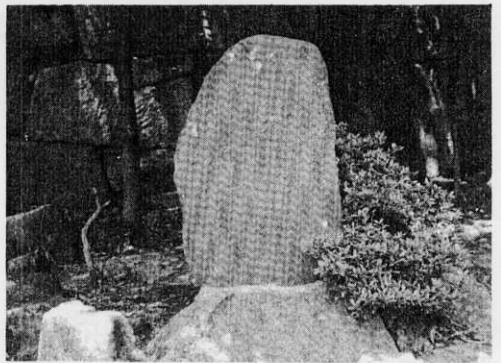
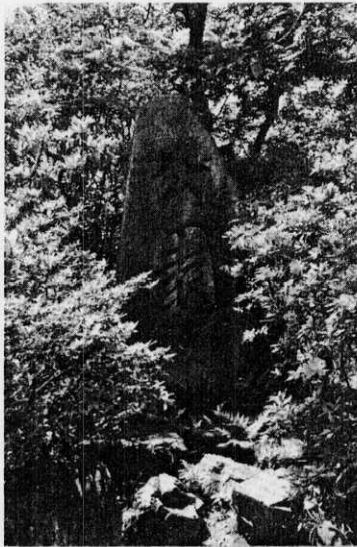
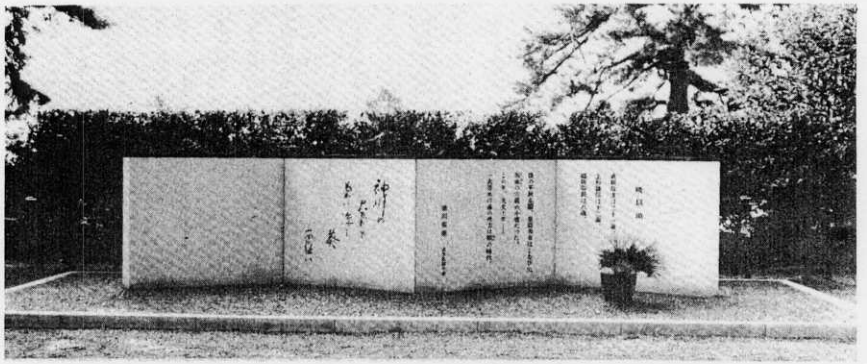


① 岡崎公園のいしぶみ



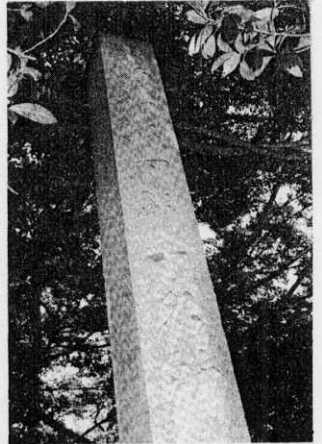
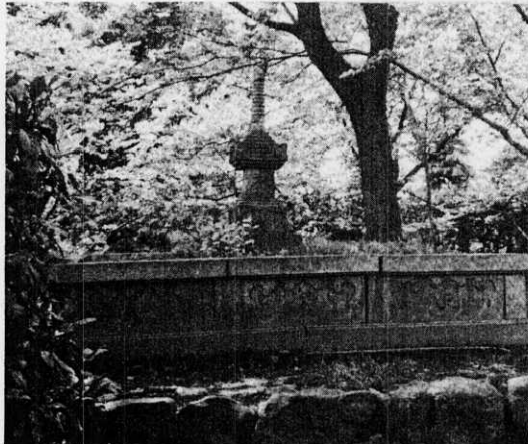
産湯井	忠義護邦供養碑
浄瑠璃坂	えな塚

- 持仏堂跡 石田茂作氏の説によると、かつて兼高長者の住居があったといふ。その娘、浄瑠璃娘にちなんで浄瑠璃廓ともいふ。また、この坂を浄瑠璃坂という。
- 産湯井 清明井、竜ヶ井と並んで、岡崎七つ井の一つ。碑陰に「岡崎市義勇火防団創立十周年記念、昭和八年」とある。
- 山岡莊八氏文学碑 市制六十周年を記念し、昨年建立。「神州の気ぞ菊に添う葵」
- えな塚 船着き場のおもかけを残す。家康のえな（胞衣）を埋めたもの。もと本丸南にあった。池上年氏のデザイン。
- 忠義護邦供養碑 西南の役より太平洋戦争まで、本市出身の戦争犠牲者をまつる。



山岡庄八氏文学碑

公園の碑	竜ヶ井
	アラモ碑
浄瑠璃姫 供養塔	愛知県下 新十名所



●竜ヶ井 家康生誕の折、この井より竜

が出たという。また、一朝事ある毎に城を守った竜がひそむともいう。

●芭蕉句碑 桜の名所にふさわしく、

木のもとに汁もなますも桜かなの句。ナンテンのしげみの奥にある。

●アラモ碑 志賀重昂が、鳥居強右衛門

の功をたたえ、長篠城下寒狭川より二つの石を拾い、類似した話のあるアメリカ・アラモにも碑を建立。

●公園の碑 豪快な筆跡、由緒ある名園にふさわしい。明治十三年建立。

●愛知県下新十名所 中日新聞の前身、新愛知新聞社が一般より募集したも

の。見事第一位を獲得。

●初代市川団蔵の碑 浄瑠璃歌舞伎にちなみ、本市出身の初代団蔵を記念して、昭和十八年、八代目団蔵が建てたもの。

●浄瑠璃姫供養塔 姫の墓とも乳母の墓とも伝えられるが判明しない。

●浄瑠璃姫石塔 昭和初期の、岡崎の名士の名前がズラッと並ぶ。中にベルツ花子などの名も見える。

●杉浦銀蔵頌徳碑 岡崎に初めて電燈をつけた功労者の記念碑。



謝 恩 会 食

大 門 小

「先生、子どもたちがすばらしい謝恩会を開いたそうですね。よく計画してくださいました……。」

卒業も間近にせまった三月のある日、S君の母親から電話を受けた。六年生の学級代表として、S君の母親は、前々から謝恩会を、どこで、どのようにしてやったらよいかと頭を痛めておられたのだ。

家庭科の三月教材「楽しい会食」。子どもたちは自主的に教材に取り組んだ。そして、学級会で、ぜひ全校の先生方に自分たちの腕前を披露して、日頃の感謝の気持ちを表そうということを決めたのである。

楽しい計画となると、子どもたちは時間を惜まない。放課はもちろん、夜まで電話で相談してくる。そして、我が家でも、夜毎子どもたちの計画書をもと

にした会食料理の試食会をくり広げた。翌朝、その結果を子どもたちに話してやると、子どもたちも、制限された時間と費用と種目の中で、さらに計画を再検討していたのである。イン

中 川 朗 子

スタントを避けたこの会食の会は、子どもたちに自信を持たせたようであった。

◇ 「先生方がとても喜んでくださったので作ってよかった。中川先生からよい点数をもらってダブルで楽しかった。」I男
「きょうは楽しい会食の会、もう少し時間があつたらなあ。



後片付けまでしつかりでき、楽しかった。先生協力ありがとうございました。H男
「子どもたちが畑へいちごを買いに来たから、つい安売りしてしまいました。」S子の母

◇ 生活記録に残ったこれらの文こそ、子どもと親と教師の、真の謝恩会を意味するのではないだろうか。「あおげば尊し」を合唱する中に、いつまでもその余韻にひたつていらつしやつた校長先生の姿が印象的であった。

新設校大門小の第一回卒業生のレッテルがあつたためかも知れないが、教育生活二十余年の中で一番心に残つた謝恩会であつた。



表 現 する こと

男 川 小

杉 本 安

去る晩、布施明の歌を聞いた。聞いたというよりも、見たといつた方がよいのかも知れない。シャボン玉のように生まれては消えていく多くの歌手の中で、彼は息の長い方であろう。その原因を自分なりに、この会で見つけたような気がする。

歌手は当然歌がうまくなければいけないが、彼には自作自演の強味がある。一般にフォーク系の歌手は自分で曲を作り演奏するが、いわゆる歌謡曲の歌手にはロボットが多い。与えられて歌わされる体のものである。そういう中で、彼には自分のものがあつた。その心が聴衆を引きつけるのであろう。そこでは作ることと演奏することの二つの表現を、二度にわたつて行つているのである。そこに醸成された歌の心が表現され、魅力を感じたのである。

さて前置きが長くなったが、学校での子供の活動は、そのすべてがこの「表現すること」ではないだろうか。豊かな表現できる子供が育つことが究極の目

的でありたい。

教育課程改善の答申の中では、音楽はもちろん、国語、社会、図工などに「表現」の二字が目につく。

音楽の授業で、表現のきっかけを作るために子供にピアノ伴奏をさせている。それも子供の手を取り導いてやる。その時はやらされた伴奏が、さも自分でやつた気持ちとなり、生気がみなぎってくる。

「S君はすごいなあ。先生が十本の指で伴奏するところを、たつた一本で弾いちゃつた。」

—— 笑い ——

表現が重視された新教育課程が示された時に、慌てて「教育は表現なり」と高唱する気はないが、子供が自ら発表しようとしたら、歌つたり、創造的に絵が描けるということは、うれしいことである。

布施明の歌がジーンとくるように、授業などで発言しなくてはおられないような子供や、グッと熱いものを感じる演奏ができる子供を育てたいものだ。



お知らせ

岡崎少年自然の家完工

5/31から集団宿泊訓練開始

緑と太陽と清流の丘、市内須
瀨町地内に、少年自然の家が
新緑したたる五月十日完工し、
さつそく少年自然の家企画委員
会による指導者講習(二泊三日)、
利用者講習(一泊二日)が開始
された。

五月三十一日から甲山中学校
を皮切りに、四季を通じ市内小
中学校児童・生徒による宿泊訓
練が開始される。

■ことしの研究発表校

全国的な規模で発表される図
書館教育・放送教育を含めて、
五十二年度の研究校の発表時期
研究主題が次のように決まった。
▽五月・緑丘小Ⅱ教材追求に立
つ授業▽六月・奥殿小Ⅱ活動あ
ふれる学級づくり(特活)▽九
月・井田小Ⅱ井田小の体力づく

【寄贈刊物・資料等】

◇小中学校交通安全指導計画
市現職教育交通安全全部編
交通事情の変化に対応し既刊
ものを改訂、B 6、三七頁
◇市少年自然の家指導の手引
市教委・市少年の家企画委編
少年自然の家を利用して野外

学習活動や訓練をする児童・生
徒の基本的な学習内容や技術、
方法を詳説・A 5、九〇頁
◇岡崎の教育
市小中学校教職員組合・現職
教育委員会・小中学校長会編
共通テーマによる二年目の教
研活動の集録 A 5、一〇五頁

■第四回岡崎市民大学の開設

年毎に好評を博している市民
大学もこととして四回目を迎えて
いよいよ充実したものになった。
張り切って準備を進めている
大学運営委員会では、より多く
の教職員と市民の参加を期待し
ている。

開設要領は次のとおり

△日程と講師①7日31日「戦
後教育の諸問題」清水幾太郎(社
会学者)②8月7日「言葉に
ついて」安西篤子(作家)③8
月28日「音楽と生活」高木東六
(作曲家)④9月11日「日本経
済の針路」都留重人(朝日新聞
社論説顧問)⑤9月15日「もう
ひとつの新西洋事情」深田祐介
(作家)⑥9月23日「遺伝学よ
りみた人間の過去と未来」木村
資生(国立遺伝学研究所、集団
遺伝部長)
△会場 県勤労会館(但し、9
月15日のみ葵中体育館)

52. 5. 1 学校基本調査より

昭和52年度 児童・生徒数、教職員数

区 分	学校数	学 級 数 (特殊)	児 童 ・ 生 徒 数			校 長 ・ 教 員 数 (非常勤講師を含む)			養 護 教 員		事 務 職 員		栄 職
			男	女	計	男	女	計	県	市	県	市	県
小 学 校	38	666(26)	12,113	11,419	23,532	458	357	815	33	6	37	24	7
中 学 校	14	253(13)	5,067	4,970	10,037	303	116	419	14	0	16	7	0
合 計	52	919(39)	17,180	16,389	33,569	815	473	1,288	47	6	53	31	7
51年度計	51	881(40)	16,372	15,648	32,020	748	442	1,190	43	8	52	32	7

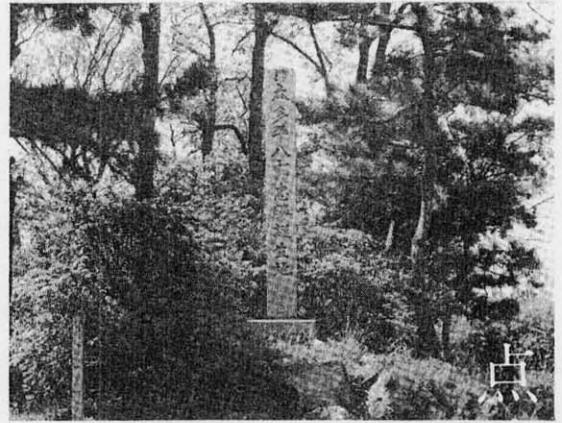
学年別児童・生徒数

学 年	小 学 校			中 学 校			
	男	女	計	学 年	男	女	計
1 年	2,327	2,175	4,502	4 年	2,051	1,963	4,014
2 年	2,137	1,957	4,094	5 年	1,612	1,619	3,231
3 年	2,169	2,012	4,181	6 年	1,817	1,693	3,510

学級・学校の規模

	小 学 校	中 学 校
1 校 当 たり 児 童 ・ 生 徒 数	619人	717人
1 校 当 たり 学 級 数	17.5学級	18.0学級
1 学 級 当 たり 児 童 ・ 生 徒 数	35.3人	39.7人

本多平八郎忠勝 出生の地



所在地 岡崎市西蔵前町

旧国道二四八号線を北へ、青木橋を渡るころ、左前方に松林の丘を目にすることができる。本多平八郎忠勝出生の地である。そこには、「本多平八郎忠勝誕生地」と、くつきり刻まれた石柱が背のびしている以外、整地された地には見るべきものもない。

忠勝は、天文十七年この地（蔵前村）に生まれ、幼名を鍋之助といた。二才の時に父忠高が戦死し、叔父忠真に養われた。後、浜松城内に移り、家康に仕え、名を平八郎と改め、忠勝と称した。

天資聡明の上、忠勇絶倫で、戦いに臨むと巧みに兵を用いたといわれる。戦場を駆けめぐること五十七回、家康が覇権を握るに至ったのも忠勝の功が大であった。慶長十五年十月十八日、六十三才で没した。

カット

竜海中

鈴木佳代子

この本を

- | | |
|----------------------|---------------------|
| ○なさけの系譜
六興出版 | 高野 澄
¥ 1,200 |
| ○表の論理・裏の論理
PHP研究所 | 会田 雄次
¥ 780 |
| ○日本人の味覚
中公新書 | 近藤 弘
¥ 380 |
| ○こちら日本
朝日新聞社 | 小松 左京
¥ 900 |
| ○木像磔刑
河出書房新社 | 山崎 正和
¥ 950 |
| ○青い壺
文芸春秋 | 有吉佐和子
¥ 850 |
| ○ことばを育てる
日本放送出版協会 | 田口恒夫・増井美代子
¥ 600 |
| ○しつけの上手な教師
東洋館出版社 | 杉山正一他
¥ 900 |
| ○雑木林の博物誌
新潮社 | 足田 輝一
¥ 750 |
| ○木曾の街道端から
筑摩書房 | 宮口しづえ
¥ 1,400 |

オアシスは、生への活源。
人、それぞれ、自己のオアシスを求める中で、自己のオアシスをすっかり涸らしている人々があまりにも多いのは意外といえは意外である。

私たちは機械ではない。潤いのある人生のオアシスを、それぞれの胸に涸らすことなく暮らしたいものである。

知ったかぶりの先生稼業。指導書に載っていることを、絶対の真実のように教えていたら大間違い。びんの中のろうそくの火が消えるのは、酸素がなくなつたからではないのだそう。

今までよう疑いもせず、ぬけぬけとうそを教えていたもんだ。自然はそうあまいもんではないと悟つたか。喝！



暑くなると、荷台に箱をのせ、旗を立てた自転車で、風鈴を鳴らして走るアイスキャンデー売りがなつかしくなる。

田仕事を手伝つた子供の頃、腰をおろし、遠くを見ながら串ざしのキャンデーを口にした時のうまさは格別であった。

こんな風情が脳裏から離れない。
幸せな子供時代だったんだなあー

透き通るような若葉に包まれた岡崎公園での取材。見どころが多いのに驚きました。

見ようとしていないんですね、日頃は。知ることに、もっと食欲でなくっちゃあ。です。か。あ。は。教室の中でも……。

子供の心が透けて見えるようになりたいですね。